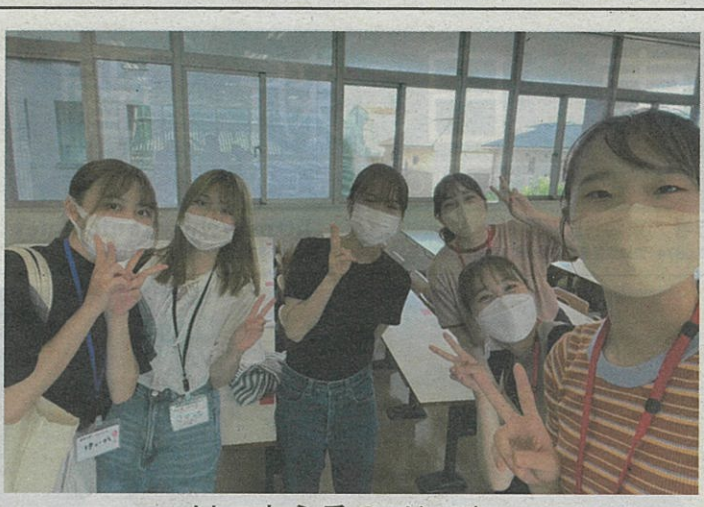

はぁとふるのメンバー

はぁとふる

学生

地域貢献事業

最終回

聴覚障害児たちを支援

2016年から継続して活動している「はぁとふる」は、耳に障害がある子どもたちが笑顔で毎日を送れるようサポートする。NPO法人が運営する聴覚障害児のためのデイサービス「楓」で、宿題を見たり、一緒に遊んだりしているという。授業が終わった午後3時から同5時頃にかけて、「行けるときに、行ける人が行く」ゆるい感じで長く活動を続けてきた。子どもたちにとっては、時々遊びに来てくれるお兄さん、お姉さんのような存在だ。

代表の渡會尚子さんは、もともと福祉に興味があることから活動に参加するようになった。活動する中で手話や指文字なども学んでいる。「子どもたちと触れ合いながら、手話を教えてもらう。よく使う言葉を覚えて、コミュニケーションができるようになればいいと感じる」という。筆談したり、ジェスチャーをしたりと、交流の方法は多彩。「できるだけ口の動きをはっきりと、身ぶりも大きくするように心がけると、スムーズに伝わるので気を付けている」。

デイサービスには、3歳くらいから高校生までの子どもたちが在籍している。中には、体の障害や知的障害のある人もいるが、「心が伝われば仲良くなれる。顔を見合わせることで伝わる気持ちも多い」と実感している。

活動の様子

多様性の向上がいわれる中で、「まだまだ障害のある人とない人の間には壁があると感じる」。障害のある人の近くにいても、手助けを迷う人が多いのは、そこに壁があるから。障害のある人と関わる機会のない人にも、できるだけ壁をなくしてほしいというのが、会員たちの願いだ。

「子どもたちとの交流から、たくさんのことを学ばせてもらっている。その学びを、広く発信することが目標。SNSなどを活用して啓発活動をしていきたい」。コミュニケーションの壁も、心の壁もなくしたい―。そんな思いを胸に、メンバーたちは今日も、笑顔で子どもたちと向き合っている。

（大林恭子）

※協力・愛知大学